小学校高学年以上

ゲンナグロの呼ぶ海

武田てる子・作　浅野輝雄・画

913

ゲンナグロの呼ぶ海

武田てる子 作　浅野輝雄 画

東京　小学館　昭和59 (1984)

142P　22cm

小学館の創作児童文学〈高学年以上 44〉

ゲンナグロの呼ぶ海　定価・八八〇円

一九八四年八月十日　初版第一刷発行

著　者・武田てる子

画　家・浅野輝雄

発行者・相賀徹夫

発行所・株式会社　小学館（〒一〇一）

東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一

電　話・東京〇三（二三〇）五五四一（編集）

五三三三（業務）　五七三九（販売）

振　替・東京八―二〇〇

印刷所・図書印刷株式会社

＊製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえします。

＊本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社あて許諾を求めてください。

©1984 SHOGAKUKAN·Printed in Japan ISBN4-09-289044-3

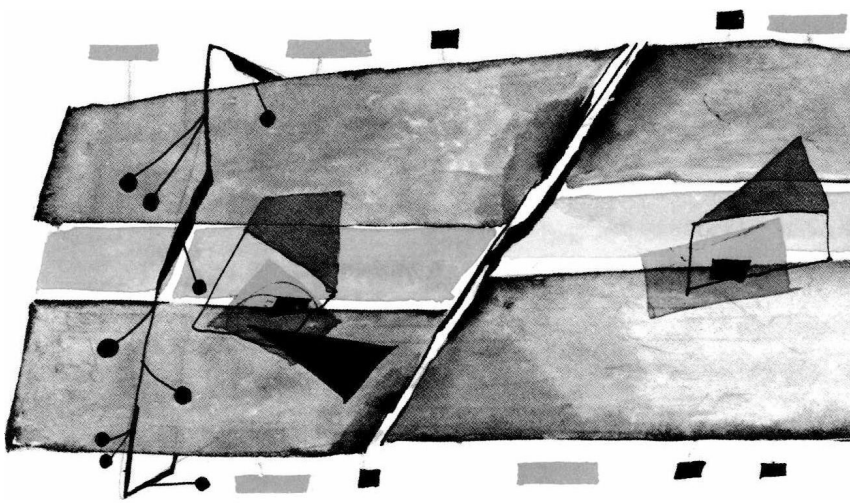
ゲンナグロの呼ぶ海

武田てる子　作
浅野　輝雄　画

もくじ

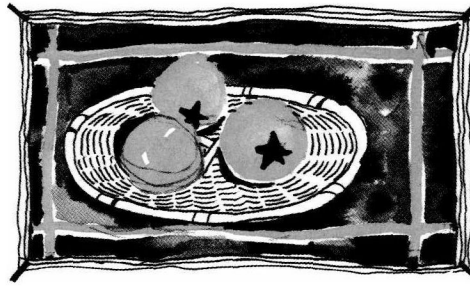
1 花火 6
2 きみ子 15
3 ゆかり 21
4 海へ 33
5 夕顔の花 56
6 夜の道 65

7 助け船 80
8 出発 96
9 嵐 110
10 波紋 122
11 約束 133
あとがき 142



装幀デザイン・中野博之

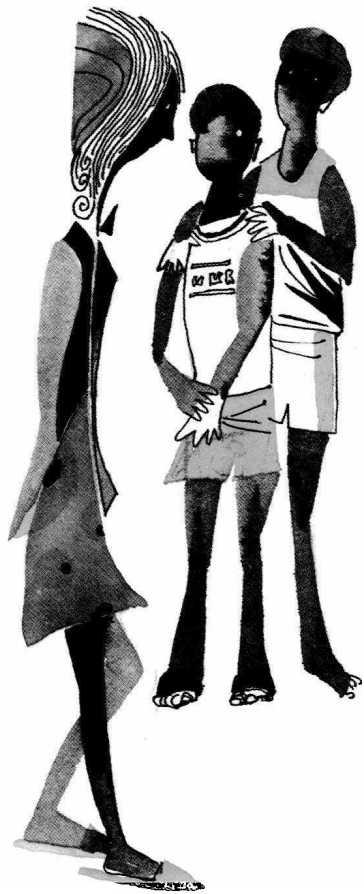
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



武田てる子（たけだ　てるこ）
一九三五年、東京・浅草に生まれる。終戦は、疎開先の静岡で迎えた。ふたたび上京、高校卒業ののち商社に勤める。結婚と同時に香川県へ。以後、埼玉、栃木、また埼玉と引っ越しをくり返す。三人の子をもつ主婦。日本文学学校第二期生。日本児童文学者協会所属。主な作品に「おかあさんのまど」「ぽけっとやチムニー」などがある。
現住所／埼玉県北本市本町七―一七二

浅野輝雄（あさの　てるお）
一九四二年、愛知県に生まれる。日本大学芸術学部洋画科卒。七七年、ヨーロッパ旅行ののちスペインに居をさだめ、個展を開く。七九年帰国、現在は油絵制作と出版の仕事にはげむ。作品として「なしの子ベリーナ」（絵本）、「わたしのしゅうぜん横町」「夏、はじめての旅だち」（さしえ）などがある。
現住所／埼玉県東松山市松葉町

ゲンナグロの呼ぶ海



1 花火

波うちぎわのやみの中で、二つの小さな光がゆれている。一つが、つーっと動くと、そのあとをもう一つが、追って行く。

（早く、はじまらないかなあ……。）

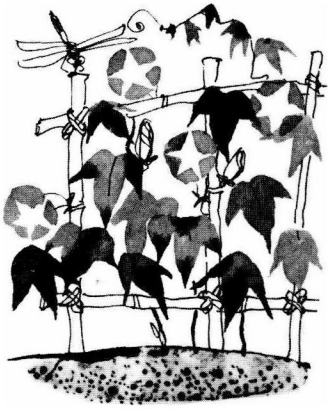
計は、胸のあたりがじりっとする。

「ねえ、あの子、だれだい？」

ふいに隣りで、高志がささやいた。計は、振り返ってみる。

二人が掛けている岩からは、防波堤はすぐ近くだ。その上に、黒い影が腰掛けて、こっちを見ている。高志の肩が、計にふれる。

「女さ、ぼくたちと同じぐらい。さっき、車のライトで見えたんだ。」



「こんなに暗くなってきたのに、家へ帰んないのかなあ。」
「うん、でもさ、きっと近くの子さ。」
計は、少し面倒くさそうに答え、また波うちぎわの光を見る。そんなことより、花火が気にかかる。父さんたちが、はたして打ちあげ花火をあげることなんて、できるのだろうか。それなのに、高志は、またこそこそと、話しかけてくる。
「なにいってんだよう。〝あかね〟が、一軒きりだったぞ。うそだと思うなら見てみろよ。」
(ああ、うるさいなあ……。)
しぶしぶ、計は岩の上に登る。
防波堤の向こう側は道路で、その向こうに、こんやから泊る民宿〝あかね〟が、窓にあかりをともして建っている。うしろには、黒ぐろと山がせまり、たしかに高志のいうとおり、近くに民家らしい光は見えない。
(どこの子だろう……。)
計も、少し気になってきた。
海は、水平線に細くひとすじの金色の輝きを残して、あとは、見わたすかぎりこいあい色におおわれようとしている。少しはなれた暗がりで、にぎやかな笑い声や話し声がする。計の母の晴子と弟の順、高志の母の鈴子と姉のゆかりたちだ。

「まったく、女っておしゃべりだね。だから、いっしょになんていられないのさ。」
大人びた口調で、高志がつぶやく。
それは計も同感だ。列車の中でも、最新鋭の超高速船ジェットフォイルの中でも、とくに母さんと高志のママは、うるさかった。
苗村計、水口高志。
二人は、東京の下町に住む六年生。同じアパートに暮す二家族が、誘いあって、夏休みを利用して、佐渡の相川町へ遊びにきたのだ。
ねずみ花火、線香花火、デンキ花火……。手に持って遊ぶ花火は、すっかり終ってしまった。
これからは、小さいけれど、いよいよ打ちあげ花火がはじまるのだ。波うちぎわの光は、花火の準備に追われている計の父の時彦と高志の父の伸二が持つ、かいちゅう電灯だ。
「ママー！」
ゆかりの高い声が、流れる。
二年生の順が、なにかしでかしたらしい。順をたしなめる晴子の声がする。
「お姉ちゃんは、もう中二だよ。あんな声だして、はずかしいと思わないのかなあ……。」
ぶつぶつと、高志がいう。
「ママー、ママー、助けてェ！」

ゆかりの声が、ふいに計の胸をゆさぶる。ゆかりと高志は、高い声がそっくりだ。

計の目の中に、暗い思い出がひろがっていく。

∴

三年生の夏休みのことだった。

町内の子ども会主催の花火大会が、小学校の校庭で開かれることになった。学校は、ゆるい坂をおりたところにある。うっすらと夕やみのたちはじめた坂道を、計は、まだ四歳だった順と歩いていた。子どもたちが計たちを追いこしてどんどんかけて行く。

「お兄ちゃん。早くう、早く行こうよ。」

順が、ぐいぐいと手をひっぱる。

「いいんだよう。ゆっくりで……。」

うかない声で、計は答えた。仲良しの高志が、もうなんにちも熱を出して寝ていた。熱は、下がったかと思うとまた上がり、少しも遊べないのだ。

(順なんかとより、高ちゃんと行くほうが、ずっと、おもしろいのにな。)

計は、わざと、ぶらぶらと歩く。

「おーい、待ってェ!」

ふいに、ききなれた声がした。驚いて振り返ると、やっぱり高志だ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

白っぽい浴衣を着て、大きく両手を振って坂をおりてくる。
細くて背の高い計とちがって、高志は色が白く、ふっくらと太っている。
計は、目をみはった。高志の走りかたが、へんだ。ぬかるみにはまりこんだ足を、力を入れてひきぬいているみたいに見える。坂道をおりてくるというのに、一歩、一歩、ひざを高く上げて、まるで、見えない階段を天に向かって登ろうとしているようだ。
「どうしたの？」
計が、かけよろうとしたときだった。
どんと、高志が尻もちをついた。痛そうに顔をゆがめ、息をつめ、両足をなげ出している。
あやつり人形が、腰についた糸をふいにひかれたようだ。もろく倒れた高志の姿が、ぼう立ちになった計の頭いっぱいにひろがる。かたくつぶった高志の目から涙があふれ、苦しそうに体をよじった。
「ママー、痛いよー。」
「どこが、どこが痛いの？」
計が声をかけても、高志は、狂ったように母を呼んでいる。
（たいへんだ！）
計は、はっとわれに返ると、順の手をきつくにぎって、助けを呼びにかけ出した。

夏休みのなかばごろ、高志は、大学病院で進行性筋ジストロフィー症という診断をくだされた。筋肉自体に病気があって、だんだんと全身の筋肉がやせ、力が入らなくなる病気で、まだ、はっきりした原因も治療法も見つかっていないという難病だった。

高志は、月に一回病状の検査を受けるために病院に通い、栄養を補うビタミン剤や、筋肉を柔かくするためのホルモン剤を飲むことになった。

二学期がはじまり運動会が近づいてきたころ、高志は鈴子といっしょに、イズミ治療院に毎日通いはじめた。そこは、人間には脊椎のゆがみから起こる病気が多いのだから、それを正しくすることで体の働きを助け、そして病気を治療していこうという考えにもとづいて開かれている治療院だ。治療師は、五十近くの女の人で、鈴子と高志を励まし力づけてくれた。高志の家族に明るさがもどり、病気と闘おうという意欲が生まれはじめた。

イズミ治療院までは、国電を乗りついで二時間はたっぷりかかる。高志は午前中の授業を終えて行くのだが、帰ってくるのはいつも夜だ。計は、高志とめったに遊べなくなってしまった。

∴

また、ゆかりが、高い声でさけんでいる。計は、ふーっと、ため息をつく。

右手の黒く見える岬のほうから、ゆっくりとくりだしてくる白い光の列は、沖に出て行くいかつり船の漁火だ。

相川湾にキラキラと浮かぶ町の灯を見つめながら、計は、心の中で指を折る。
（今日と、あしたと、あさってと、しあさってと……。）
高志が元気だったころの夏休みのように、一日じゅう、いっしょにいられるのだ。でも、喜びの陰に、計は、かすかな不安がただようのを感じる。おっとりしていた高志が、このごろいらいらとして、かんしゃくを爆発させたり、わがまま風をふかしたりしている。
この旅行に出る前に、計と順は母の晴子から、高志ちゃんとけんかをしないでねと、きつく注意されている。
「計ちゃん、やっとはじまるね！」
少し舌ったらずの高志の声が、澄んだ鈴の音のようにふるえる。
波うちぎわでオレンジ色の小さな火が一つともり、つづいて、ずんずん隣りへ隣りへとふえていく。ライトが二つ、白い光をはきながらからまるようにゆれて、こっちへ向かってくる。
向こうで、オレンジ色の火の玉が吹き上がる。火の玉は、光のしずくをまきちらしながらぐんぐんと高さをまし、計たちの頭の上で、ぱーっと紫色の花を開かせた。浜辺が、昼間のように明るい。時彦と伸二のしゃがみこんでいる姿が、くっきりと浮かぶ。ゆかりも順も晴子も鈴子も、ほーっと口をあけて空を見上げている。
シュポッ、シュポッ……。軽い爆裂音。いくつもの火の玉が、空へ向かって走り、赤や青の

花が咲く。

「きれいだっちゃあ……。」

うしろで、ため息まじりの声がした。

（あの子だ！）

計は、振り返る。白っぽい洋服で、花火のせいか髪の毛が赤く見え、目が、ぬれているようにキラキラ光っている。

高志が、したり顔でささやく。

「ぼくが思ったとおりだ。あいつさあ、ぼくたちの花火が見たかったんだよ。」

「うん、でもさ、いいじゃないか。見せてやろうよ……。」

知らない女の子に意地悪なんてしたくないと、計はまた花火を見上げる。

「そうだね。ぼくたちが買った花火じゃないもんね。パパたちがお金だしたんだもん。」

いつもなら、どなっておいちらしてしまうだろうに、高志が今夜はやさしい。

計はほっとして、そうだよとうなずく。

東京へ帰れば、高志は、また治療院通いをはじめるのだ。たった四日間だけれど、高志にとって大切な夏休みだ。そうだ。高志はきっと、楽しい気分で過ごしたいと、だれよりも強く思っているに違いない。

仲良くするのよ。母さんのいいつけが守れそうな自信がわく。

「ヤッホー！」

計は、また上がった花火に向かって、思いきりさけんだ。

2　きみ子

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！」
あくる朝、計は、順にゆり動かされた。
もう、全員が起きている。
二十じょうの広い座敷に、残っているのは計の布団だけ。
みんなそれぞれ、荷物をつめかえたり着がえをしたりしている。
「もっと早く起こしてくれればよかったのに……。」
順をにらみながら、計はとび起きた。
高志は、もうさっぱりとしたうす水色のティーシャツを着て、両足をなげ出して柱にもたれている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com